

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	冬の繪[承前] : 文苑
Author(s)	紅鱒
Citation	龍南會雜誌, 120 : 59 - 70
Issue date	1907
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6023
Right	

冬の繪

紅 鱒

四

「天旭と云ふマシツク師の娘だと云ひますが、星といふのに崇美の念が起るのです。胡蝶は春の可愛いんですけれど、只愛らしいと云ふ許りでは、濕つた雨にも黴られる。星と云ふのに氣高き一層の美を増して居るので——年は何んでも二十一……」

「ホ、似合つた年頃」

察してわ仙が手を重ねる、火鉢に青き櫻炭、ちろ／＼と夜に陽炎する。

嬉しいと云つた聲に唾をのみ「品のある縹緞で、まあ惡い心地は無いですあゝ」ト私かに驕りの思ひを沈めて

「胡蝶と化つて舞うた時は、春の女神の私語が、羽風に通う様でして、咲きかたまりし葦の花に、野は一面のひた紫。壺んでかくれし小さき藥に、とろ／＼と覺束無げの夢をまごろむ神の使も見ねるやう。然し闇ですから、實際には花も何んにも見ねはしません、全く心の作用です。

草の中には細々と水が流れる。其の水はどこ迄流れて行くのか知らず、心で水に添うて行くと、次第に幅が廣くあつて、或は一杯に、暖かき波を堪へた湖にでもありはしまいか。其の湖から再び細き流れにあつて、果てしも無く廻りまわつて、春を決してぬがさぬ様に、取り圍むのではあるまいか。或は一條真直に、人の知らぬよその國へ、輕るやかに浮かして行くのではあるまいか。果かあき心に

ついで行くと、びつよりと花がひた濡れた尻無し水。

春は此のうちに眠つてしまつて、また來む春を待つのであらう。其の大きな僅かに掌を以て蔽ふばかり。中高かに盛られて、薄く曇つた日を落し、鏡にふれた息の聲、ぼんやりと光を消した面のほひに胡蝶が一羽水鏡。たゞみし翅に化装の氣も無く、鬚と云ふのをかしいですが、矢張りまゝお鬚と云ふより言葉も無いです。蠶豆の蔓と云はうか。長き躑躅の葉と云はうか少しく卷かれた先きに隠れて、涼しい瞳がパツパツと明かに。

紫立つた翅の紋が、手に取る様に映るのは、掬はく消ぬむ玉笹の霰にまして美う。

ぞつと心がときめいて、びつたり草に身を伏して、蝶の様子を覗ふと、薄き衣の一枚一枚、肩からはいでぬいだのを、水に向つて靜かに振れば、波は細かく影を彫んで、浅くはかれた白粉が、小松の花と散るんです。

匂ひを溶いた風が低く、草の面を撫でゝ來る。

する／＼と其の風に誘はれたとでも云ふんでせう。僕は腹這ひながら草を分けて、蝶の後ろへ私かに潜み、息をとめて見上ると、裳が少しく草に皺んで、蝶はあたに去らうとする。莖の耳朶が縫にかゝつて、糸に引かれて切れて落つる。僕は莖に味方をして、蝶をとめむと腕に抱けげ、ほのかに甘き氣にむせて、去りおは蝶を溶かさうと、あつき接吻を犯かしたんです……が。

憧憬の霞は此の時電光に劈かれて、紫白の球が蠅の如く瞳の前に踊りを踊つて狂ひました。

一髪の間にあはや、奈落のどん底に、僕は墜ちむとしたんです。

此の時柏手が霞の如く、一齊に満場に起つて、氣付いた様に臉を開くと、忽ち亡想の奴隸から宛
されまゝた。

天星の衣には五陵の星の総模様です。青々としてけざやかに。僕は水晶の如く透明を覺えました。
刹那にハッと幻燈が消えて、暗はあや無く、凡てを包み去つたんです。電気は直ぐにつきまゝた
が、既に紅るの幕が引かれて居りました。微盡も止めず、汚れの心は消えまゝた。僕は全く透明の
子となりました」

肩をなだらかに黄縞が流れて、象雄の腫が天に凝る。

パヤンと火鉢に炭火がはねた。

「星の啓示に悟つたんです。

れ仙は膝の朱羅子をグイ。笑がフワンと鼻からぬけた。煙管でせきを搔いて居る。

五

すいとコルセットで腰をしぼつた男、薄い上鬚を針金の様に固めて、上へ向つて跳ねたのが、却
つて一種の滑稽を催させる。針金の鬚に應じし槍鳥賊の顫、避雷針の鼻、壘の如き頭筋へは高いの
を真白く攻め、辨慶縞の赤いネクタイに緑玉のピンが寔に異彩を放つて居る。胸には何にやら長い
紫の花を束ねて、斜つかいにボタン穴へ挿してある。どこへ迄も異彩を放つ男。

引幕の前へ細いズボンの縞長々と立つて、指輪の螢が眞向から、綺麗に分けた芭蕉の髪へチラ
リと潜ぐると、返しが針金の先へさわつて、少く胸へ下ると忽ち、避雷針に稲光。朱鷺色の手巾に

ふふんと鼻をかんで見せたり。口狀よろしく幕はからりと左へなる。暫時賑やかなる器樂の囃。舞台向つて正面には明晃々たる一基の姿見、到しまに三千丈銀漢の流れで墜ちちが如く、縁に摺つたる箔の光は、まともに電氣を射返して、まこと燦たるものである。

細かき靴の音が聞える。下手に颯と光がして、胡蝶の天星。

銀絲を綴れる洋装の、裾さわ／＼と風を卷いて、敷き列ねたる絨氈の花に花粉が乱るはかり。舞臺よろしき所へ進むと、見ねぬ踵にざらりと長く、裾は左に金波をちぎらし蓮歩を軽く右へ廻

る。面はゆげなる鏡の顔と細つそりとしなやかか後姿と、兩面の美はまさに満場の觀客を／＼何れに瞳を注がむかと惑はしむる。鏡の中の天星が後姿の天星を次第に近く引きよせる。近まさり／＼てあでやかか。にツとゑまひの齒が映つた。

見惚るゝ客の笑止やの。石垣の如くむくつけく打ち重なつた顔が並んで小さく映るは只一人をして完全の美を擅にせしむむ爲めに、凡ての美を舉げて奪ひ盡したのである。六宮の粉黛悉く春の温泉の滑らかなるに溶きませて、太真一人朧々の月下に湯浴みするは丁程かゝる見わてはあるまいか。燕雀小米の花に隠れて、獨り花王の牡丹に驕る孔雀はまさに天星である。ゆら／＼と王をちりばむ、紫の羽一杯に陽光を廣げそよ吹く春の風にたされて、一左し舞が所望々々。

エムの喇叭がブツと鳴る。

魔術の筈を靜かに置いてた目通り正座へと座長の天旭、まこと従容としたものだ、ハットを右に裏を見せず。左の掌廣く見せて、たはどかに一揖。靴をぎしりと右へ廻る。

舞臺の下手引幕しこいて垂れた隙、樂屋の人の頭が見える。其處から綱が一本上つて、車を廻つて垂るゝこと三尺。錠前厳しきトランクを吊つて、蜘蛛手に繩がかけてある。天旭帽子を置いて筈を取る。オムの喇叭がブツトとなるバチツと喇叭に火花が散つた。

（これある女、人形ではありませんぞ。全く生きて居るんでねす。にッど笑へば鏡に映る。鏡も何んの仕掛は無い。床屋のものよりズンと上等だ許りでねすぞ）

筈に鏡を叩いて見て、吾に仕掛がありと云ふ見ね。首傾けて寂と聽く。

（別に變りはあらんでねす）

筈を返して天星の肩、端軟らかにふと觸れる、ト器械の様に向き直り、客の視線は鏡をそれた。乳のあたりに衣の皺、肉ゆるやかな腕を曲げ、腰が流るゝ水を掬ぶ。しとやかにうゝしげの挨拶首から細き金鎖、すいと引いたら鳴きもせう。腹に仕掛の人形の様だ。

（誰れがあらう。鏡の用意はよいか）

上意の下にあられも無く、腹の膨れたチャリが出る。

（スツバリ宜ろしうごせりいすクツクツ）

腹を揺すつて下手へかけ入る。

（先つは彼方鏡へと歩ゆませませ引す）

千リ々と囃しに連れて、鏡に逼る。鏡一杯の銀になる。此處に白きリオンを掛けた椅子がある。天星軽く身を任すと、パネは手毯を弾くやう。椅子高かければ、裳わづかに地を離れて、ひだのこ

ばれに赤き靴下、細つそりと可愛ゆく見ゆ。乳房に指を淺く組んでにつこりと笑ひを含んで眠りに入る、乙女の姿暫しとも――

(これは三保の松原伯龍と申す漁夫にてさふらふクックク)

上手ヘチャリの腹が出る。

陰より謠の

萬里の高山に雲乍ちに起り、一樓の明月に雨始めて霽れたり。

アツと喇叭に謠がやむ。

(一樓の明月、彼方鏡へと抜けさせま引す)

謠

實に長閑かなる時しもや。春の景色松原の浪立ちつゞく朝霞、月も残んの天の原
(月も残んの乙女が姿。よつく氣をとめて御覽うじろ。残るは今の暫しが間、霞とあつて散花の奇術、乙女は乍ち、彼方トランクへと忍ばせま引す。イエツ)

上げし筈が風を切ると――乙女はあらず。一かたまり櫻の花が宙に開いて、ひら／＼と土間の框へも散つて来る。チョンと拍子木、から／＼とトランクが下りて來た。

六

「茲に至つて僕は、トランクの中から出づる天星を観るの勇氣は無かつたんです。胡蝶に化して咲き満ちし、春の堇の紫に、一差し舞ひを舞ひをさめた天使の如き乙女が今、あなた、錠前幾重に

も嚴しくたろし、繩を四方にくくり上げた、トランクと云ふ束縛の中から、腰手足など、さながら蜂に襲はれた、蜘蛛の如くにちかみ、再び舞台に現はれて、満場の観客に面をさらすは、見得る勇氣の無いのが當前です。一度隠れたものが現れるは、是れは至當のことですが、鏡に抜けた天星は、隠れたと云ふより寧ろ消れたんです。失に消せたんです。消ゆると云ふ程果か無い美は他に類がありませんか、而かも鏡に花が、いね星がです。花なり星なり消れたと云ふんではありませんか。山の端遠くあけ放れる、薄紅の曉に、覺る星の消に去りしにも、全く變りはありませんか。其れも隠れ空の中に見ざる星をさぐるのは、水の流れに數書くよりも果かなくて、そぐろに美しい氣はありますが、ね仙様、其星がです、消れたと見しは全く下界へ飛んだので、葎の中に蛇の衣など淺ましく抜き切れたるに、見惡き蛙となつてひよくと動き出だしてわたしが空の星ですと、腹まで見せて口をきいたと想つて御覽なさい。少くとも人の眞向きに見得る所ではありますまい。一度消れたものはなんでも永久に消れてしまふと想つたら、是れ程かあゝい美はありません。美は悲しいうちに最も美しく潜むを好むものです。流轉輪廻を以て慰むるは、其れは宗教です。詩でありはせん。悲しい中に美を見出して其の美にこがれて満足するのが詩人の安心立命です。」

眉を開いて半ば悟り、天に聖座をさすものらしく、人さし指を一本立て、
「私が戀ひし胡蝶の天星は鏡をぬけて、永久に消れ去つたんです。消れて靈氣を遙かに求めば、其れは天地に彌漫して居る、云ひしれぬ美しいたばらの霞です。トランクの中から再び現るのは、

其れは世の中の娘であつて、手品師と云ふ、一種の興業師きぎやうしの子であります。誰れが醜い興業師の子になんぞ戀を捧げるものですか。天星は成る程やゝの子に違はありませんが、是れは形の天星です、私の心にうつた彼れは決してやしの子ではありません、胡蝶です、胡蝶を舞うた胡蝶です。胡蝶が蒼い空の樣を鏡に消れてゝまつたんです。形に云はゞ強ひてゝすが――形に云はゞ消れて果か無きたぼろの霞です。霞に戀を捧げたんです。霞は化せば蝶になります。トランクの中へひとめば蜘蛛となります。然し世間の人は蝶が蜘蛛になつた所を不思議にも珍しく喜んで、蝶が蝶になつたつて、何の面白いことがあらうか。蝶が蜘蛛にあればこそ面白いのではあるまいかと、矢張りトランクの中からでるのを片唾を飲んで視つめて居つたです。こんな世間の人に交じつては、折角美しい想ひが汚れると、直ぐに座を蹴つて僕は舞臺を出たんですが、……」

「月が朧ろに霞がびつしより、向うは雨が降つてゐる川が見えたで御座んせう」

た仙はやさしく手をならべて、火の氣に臘の指が熔けさう。わつとりしたが言葉短じかに

「あなたは屹度歸りましたか」

「た仙さん……」

聲がふるへて

「矢張り僕は人間でした。一度は透明の子になりましたが實にす時の透明でした。冷々と澄んだ水晶でも、極めて熱き烈火にかければ、熔けかたまつて曇りの色に變ずるでせう。

僕は再び熱する心に透明を失ひました。耻辱の懺悔を告白するのは、全く此處の所です」

「其んから矢張りトランクを」

「いねえ、其んな聊かお事ではありません。た仙様ら裸体の女神を………」

「は！裸体の女神」

「裏手に廻つて圍の陰から灯が漏れてをりました。あかりに照れて白やかな………あゝ僕は全く或るいみじき魔性の物に魅られたんです——」

肩をせばめて片手を拱き、ふつさり垂れし髪の流れ。

「まあねに」

トた仙は小指の爪に眉を搔いて、少しは話せると云つた見ね。

七

木戸を抜け出でゝ象雄は獨り、ふと見し霞の戀にあこがれ、歸る暇の新開町。曇れる月に若い象が鼻にかられる白地の手拭、暗なれこそ白からめ。月のあかりにぼうとして、手を懷ろに包む後ろ、短かき袖が宙にふい。脚が少しく千鳥をかけて、落ちたる影が地に濕つた。

すつと兩側の揚弓店。

夏近かがある葎簀の店に、更けた故でもあるらしい。近くに舞臺の囃子が聞える、矢張り春の夜の景色。(あやめ)と書いた掛行燈、臘が夜更けの短かくなり、下ばかり明くて、上は(あ)の字も見え無い位、底より、短かい草にさして、半疊程の縁があざやか。葎簀の店に寂しく立つ、女の聲の笛吹く様。

(たはいり引す)

調子の末を風が煽つて、裏をかへした前垂の、模様が薄く左字にあやめ。

「其のねいさんが、天星にそっくり。」

湯呑を取つて飲みもせず、

「氣の故では無んです」と註を加へる。

「引きまごひたる花あやめ……………」

「と云ふわけでも無いんですが、矢張りひかれて這入つて見ると別に女が一人居る、斜つかいに柱へ凭つて、眉をあつめて目を圓らに、ほつれた矢弭の糸をかゝつて居るんです。外面の娘の姉さんなんで、是れも天星にそっくりなんで」

「どうかして居らつしやる。氣なんだわね」

「いね、事實です。全く似て居つたんです。が氣の故もあつたんでせう。何んだか變に風が温るくつて、火屋の片側が木目をひいた様な油煙、天井板に灯がうつると、梁を貼りかくした無地の洋紙へ、くすんだ雨のしみの跡が嫌やな形に見るんです。其處へ管を通した針がチョン。長くからんだ糸が一筋。地へすれ／＼の所へ一つ大きな的が吊つてあると、小さいのが吊洋燈と全じ高さに、金紙のゆう／＼と、影が、だんだらの幕に揺れるんです。

机の上に扇子形の、鳩の入る程穴をくつた、小さい箱が横に並んで、白羽の小矢がびつしり立てられ中に丹塗りの小さい揚弓。

揚弓ばかりでは、自然客種も限られると云ふわけで、玉轉かし、空氣銃なんて云ふのもあるんでんす。白木の棒に薄ッぺらな木羽が小さく金釘ぶつつけ。まるで猿芝居（さるしばゐ）の鼻首臺、こんなのが四つ程並んで居る。一番右が正宗の空堀ごうりと危く寝ころんで居つて、是れへは手毬を投げるんでせう、箆に炭圍の様なが一盛り。其れから外の三つの臺には、煙草の箱が縦に小さく、二つ載つかつたのもあるんですが、何れ安煙草ばかりなんで、胡蝶と云ふのが、此の頃出来た値安すの兩切、臭いんですよ。全くのめはく無いんですが、當つたんですから、よくこと無くのこれですがね——」

と小指にちんと灰を弾いて口をつぼめて喫つて見せる。

「煙草は勿論下等ですが、胡蝶と云ふのに、何んだか妙の氣がしたんです、胡蝶の舞の天星で、似たと云つても活きうつしの矢場の女が、其れを當れば持つてゐらつゝやいと云ふあんばい、氣がたまさあね、何んだか神秘の綾糸が此店の姐さんにも、からんで居るのちや無いが知ら、と、魅られたんです。」

煙草が胡蝶。胡蝶の舞私の號も胡蝶と云ふんで

際どい所で發表する。

「わたしをあなたはどう思つて」

あなたも號で……」

颯と一陣。

（「オ、ハ、廟髪では無いことよ」

（ことよ）を可笑しく。

「矢張り似ては居ませんか」

「何んだか、云へば……………」

「似て居るんで御座いませう」

「妾が一番の姉なんですよ」

「ちや 天星はあなたの 姉妹」

大凡からずギョツとする

「天星さんとやらには、あかの他人で御座いますよ」何んでも無いことに打ち消して

「他人の空似と云ふんでせう。向うでこちらに似るんでせう」

意氣昂揚

「と思つて僕はグツとしたんです」

湯呑をグイと膝の前。

「で先きの話ですが、何んだか、胡蝶を射たくなつて……………」

「紋切形ですわね」

袂を合すと、細つそりし

「「わい者を見たんでせう」

炭火が黒い鉄瓶に映つる

（未完）